

困難を抱える本人・家族への支援の在り方を学ぶ研修会 ～3回の研修会の総括&各講師の支援共通姿勢～

今年度、当法人では3回にわたり、精神的・社会的な困難を抱える本人およびその家族に対する支援の在り方を学ぶための研修会を開催した。

講師として、訪問支援の現場で本人との関係性構築を重視する峯上良平氏、トラウマインフォームドケア（TIC）を基盤とした支援の実践を展開する田邊友也氏、そして家族支援の段階モデルを提唱し、長年にわたってひきこもりや精神障がいの家族支援に取り組んできた山根俊恵氏をお招きした。

3氏の講演はそれぞれの専門分野に根差した内容であったが、共通して語られていたのは、「本人や家族をどのように理解し、どのように関係性を築いていくか」という支援の根幹に関わる問いであった。支援の方法や手段以上に、支援者自身の“在り方”が問われる姿勢が印象的であり、それは現場に立つ私たちにとって大きな学びとなった。

三者の講演を通じて見えてきた、支援における共通の基本姿勢は以下のとおりである。

第一に、「本人中心の視点と尊重の姿勢」である。本人の意志や語りに耳を傾ける姿勢が、すべての支援の出発点となる。田邊氏は、否定や評価をせず中立的な態度を貫くことが、トラウマを抱える人々にとっての安全基地になると述べた。峯上氏も、本人の生活空間に入り込み、“される支援”ではなく“共にある支援”の重要性を強調した。山根氏は、ひきこもり状態の本人に対して直接関わるのではなく、まずは家族の視点を通して本人の想いを尊重する重要性を語った。

第二に、「信頼関係の再構築と関係性の持続的支援」である。支援の現場では、目に見える変化よりも“関係性の質”が支援の成否を分ける。焦らず、変化を急がず、相手のペースに合わせる「待つ支援」が求められる。田邊氏は、TICの基本原則として「安全・安心・信頼・選択・協働」の5要素を挙げ、これらが人との関係に傷ついてきた人々にとって、回復への足場となるとした。峯上氏も「訪問とは信頼をつくる行為であり、信頼のない支援は押し付けになる」と語った。

第三に、「家族支援の重要性と段階的なアプローチ」である。山根氏の提唱する「家族支援の段階モデル」は、感情の整理、信頼関係の構築、情報提供、体

験の共有、本人理解、家族の変化、本人支援への展開という段階を経て、家族の視点と支援者の伴走により本人への支援につなげていく枠組みである。家族の不安や孤立を和らげることが、結果的に本人の支援にもつながるという考えは、他の講師の実践とも深く通じ合っていた。

さらに共通する視点として、「否定しない言葉の力」「多様性の受容」「語り直しによる自己肯定の支援」が挙げられる。どの講師も、支援の場における言葉の重みと、それが相手に与える影響に細心の注意を払っていた。支援とは、知識や技術だけでは成り立たず、人間としてどう向き合うかという倫理的姿勢が不可欠であるとあらためて実感した。

今回の研修は、対象者の抱える困難の背景に対する理解を深めるとともに、支援者自身の在り方を見直す貴重な機会となった。私たちは今後も、一人ひとりの尊厳を大切に、支援を受ける人と共に関係性を紡いでいく姿勢を持ち続けたい。そして、実践のなかで迷いながらも、常に問い続けること、「この関わりは、利用者にとって本当に安心できるものであったか？」という自問を忘れずに歩みを進めていきたい。